

編集委員会への手紙

「考え続けるために、今、思ったことを」

この文章を書いている最中にもなお続く余震、ますますその重大さが明らかになる地震と津波による被害、そして予断を許さない原子力発電所の深刻な状態に、一刻も早く事態が収まり、被災された人たちに一日も早く平穏な日々が戻ってくることを願わずにはられません。

深刻な状態に陥っている原発で作られていた電力は、地元のためのものではなく、首都圏に送られてそこに住む私たちの暮らしと活動を支えて来ました。このことを思うと、住み慣れた土地を離れ、いつ帰れるかも分からないまま避難を余儀なくされている原発周辺の住民の方々、放射能の不安にさらされているその近隣地域の人々、そして原発の深刻な事態の中で懸命の作業を続けている人たちに対し、ただただ申し訳なく、ことばもありません。私たちがこれまで享受していたものは、この人たちに危険を強いることで作られていたという事実のもつ意味を、まざまざと知らされたという思いがします。この原発事故が直接には地震と津波によってひきおこされたように見えたとしても、自分たちは遠くにいて他の人たちに危険を強いるというしくみの中に、本当の原因があるように思えてならないのです。

あの地震から、もう2週間がたちました。地震のゆれがようやくおさまり、津波からもやっとの思いで逃げ延びたところへ、万が一の念のためという避難を指示され、とるものもとりにあえず住み慣れた家をあとにしたと思うまもなく、原子炉からは放射能を帯びた空気が放出され、原発では爆発がおき、食べ物からも飲み水からも放射性物質が検出され、大地も海も放射能に汚染され、……。そして、この悪夢のような出来事はまだいつ終わるとも知れないのです。

原発を作るには、地元の人たちに絶対安全と信じてもらうことが必要でした。そのことばを信じた人たちは、裏切られたという思い、そして信じたことを後悔するやり

きれない思いでいっぱいでしょう。そして、絶対安全という前提のもとでは、万一のとき、どのように避難し何に気をつければよいのか、全く知らされていないからではないでしょうか。知らされていないからこそ募る不安は、いかばかりだったでしょう。

原発で働く人たちにとっても、起こるはずのないことが起きてしまったのではないかと思います。何重にも安全が講じられ、まさかのときにも緊急炉心冷却装置が働くから、日本の原発では重大事故はありえないと教えられていたのではないのでしょうか。しかし現実には、全く予想もせず備えもなかった事態が次々に発生し、訓練さえしていなかった作業に追われているのだろうと想像します。そして、作業中に被曝する人も出てしまうという懸命の努力にも関わらず、事態はなお予断を許さないのです。

こんなことは一度でたくさんです。私には、人間の力で原子力を安全に制御できるという考えをもはや信じることはできません。絶対安全という説明に、絶対などありえないと思いながらも、疑念の声をあげることなくここまで来てしまったことが悔まれてなりません。こうしたことの後でもなお、大都会に住む私たちはそれでも電力は必要だから、どこかよそで作って送ってくれと言いつけることが許されるのでしょうか。私たちが暮らし活動し続けるには、本当にそれ以外のすべはないのでしょうか。

今は誰もがただ、このような事故を二度とくり返してはいけないという思いを深くしていることでしょう。このことを原点として、何をすればよいかをこれから考え続けるために、今この事態の中で思ったことを書きとめておきたいのです。

数学通信の「編集委員会への手紙」がそれにふさわしい場かどうか分かりませんが、私たち数学者は原子力について専門知識をもちあわせていないかもしれません。それでも科学者そして市民の一人として、みなさんにお知恵をいただければと思うのです。

斎藤 毅（東大数理）